



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



法隆寺大鏡第五十集挿圖解説

- 第一、第二、御物金銅四十八體佛 (其廿六)
總長一尺四寸六分
膝張六寸八分
- 第三、同 同 (其廿七)
總長一尺六寸
佛身高九寸五分
- 第四、第五、同 同 (其廿八)
總長一尺五寸八分
佛身高一尺三寸八分
膝張五寸八分
- 第六、第七、同 同 (其廿九、三十)
其廿九總長一尺〇九分
佛身高八寸一分
其三十總長一尺二寸二分
佛身高九寸
- 第八、第九、同 同 (其四十二)
中尊高九寸四分五厘
光背高一尺六寸
脇侍總長九寸八分
佛身高六寸八分
- 第十、第十一、同 同 (其四十三)
寶寸

第一及第二圖に現はせる如來像は、推古朝佛像に最も普通なる形相にして、其手相は本集既出の四十八體佛及び金堂の樂師如來釋迦如來等に於て見る所にして、又幾度か其解説を草せしを以て、今案說せず、其釋迦如來とすべきか、樂師如來と稱すべきか、固より適從

する所を知らず、寶髮は一類毎の螺髮を造るの困難を避け、髮を小刻に作成し、其以外は渦線を刻ねて其趣を現はせり、此省略法は銅造には屢々見る所なれど、時代的古制をとれるは本像などを推すべし、此手輕き手法より通身の造り具合を比較すれば、殆ど剛柔の差ありと云ふべく、袈裟の端々の反りより其髮文に至るまで、飽くまで當時の様式を失はざらむことを努めて、其だ重厚に過ぎたるの感なくむばあらず、所謂北魏式髮文の角度ある曲線の繰返しは、金堂の樂師釋迦像に比して、左右の均齊を嚴守して、秋毫も差へざることを、其裳の驚くべき規則的なるを見て明かならむ、彫刻の伎巧發展の上よりすれば、一度此域に達して後、金堂如來の如き較自在の地を得らるゝ筈なれば、本像を其先驅と見做し得られざるにあらねど、或は時を同うしながら伎巧の巧拙を以て、此結果を生ずるに至れりとも論じ得られざるにあらず、兎も角同様式のものたるを否むべからざるなり。

其卅七また何如來たるかを詳かにせず、單純なる並行的の線を刻みて髮文を現はすに努む、螺髮は別に取付けしを以て、墜落其大部分を失へり、連座は上に窄み下に擴く、各瓣間味を帯び來つて新様式に移れるを見る、思ふに奈良朝の初期若くは其以前に係れる作ならむ。

其卅八は全身被衣寶冠を戴き拳手半曲をなせる像にして、推古朝の手法を奉じながら、形相としては實に珍らしき異尊なり、之を彌勒菩薩と稱すべきか、或は他の菩薩に擬すべきか、今考ふるに由なし京都唐山寺に略同形の木造のものあり、傳へて如意輪觀音と云へど

下は、その形、色、質、量、を、その、所、謂、乾、漆、系、諸、尊、中、其、形、の、最、も、大、な、る、の、と、す、
從、よ、て、其、力、強、き、特、色、の、又、極、め、て、鮮、明、な、る、を、見、る、頭、部、大、に、過、ぎ、越、
身、較、々、矮、小、の、嫌、な、き、に、あ、ら、ざ、れ、ど、も、次、て、起、る、べき、平、安、朝、初、期、の、一、
木、彫、成、の、作、風、に、比、し、て、彼、に、見、る、が、如、き、猪、首、に、し、て、胸、隔、の、狭、小、な、る、
と、は、異、り、て、姿、勢、鷹、揚、に、し、て、金、剛、不、壞、の、趣、あり、髮、文、ま、た、悠、容、な、る、
曲、線、を、使、用、し、以、て、姿、勢、の、表、現、と、照、應、す、る、に、努、め、た、り、全、身、木、心、乾、
漆、寶、髮、は、純、乾、漆、奈、良、朝、彫、像、と、し、て、ま、た、一、種、の、異、彩、な、る、を、失、は、ず、
臺、座、の、制、蓮、肉、座、を、高、く、し、引、筋、子、を、大、に、し、特、に、反、花、を、扁、平、に、し、
て、其、面、積、を、擴張、し、以、て、大、な、る、二、段、框、座、と、の、釣、合、を、計、れ、り、然、り、面、
し、て、此、大、な、る、二、段、框、座、の、莊、重、な、る、像、身、を、受、く、る、に、適、當、す、る、の、み、な、ら、
ず、臺、座、の、各、部、ま、た、能、く、此、像、身、の、莊、重、を、助、く、る、に、於、て、其、意、を、得、た、る、
もの、と、云、ふ、べ、し、

脇侍菩薩にして、所謂乾漆系諸尊の中、其形の最も大なるものとす、
從よて其力強き特色の、又極めて鮮明なるを見る、頭部大に過ぎ越、
身較々矮小の嫌なきにあらざれども、次て起るべき平安朝初期の一、
木彫成の作風に比して、彼に見るが如き猪首にして胸隔の狭小なる、
とは異りて、姿勢鷹揚にして金剛不壞の趣あり、髮文また悠容なる、
曲線を使用し、以て姿勢の表現と照應するに努めたり、全身木心乾、
漆、寶髮は純乾漆、奈良朝彫像としてまた一種の異彩たるを失はず、
臺座の制、蓮肉座を高くし、引筋子を大にし、特に反花を扁平にし、
て其面積を擴張し、以て大なる二段框座との釣合を計れり、然り面、
して此大なる二段框座の莊重なる像身を受くるに適當するのみならず、
臺座の各部また能く此像身の莊重を助くるに於て其意を得たる、
ものと云ふべし。

第十六、 網封藏 絹本着色法相曼荼羅圖

高三尺三寸幅一尺四寸一分

法相曼荼羅なるもの極めて善し、圖様を見れば宗の本尊と知られ、
たる彌勒菩薩の蓮花上五輪塔を安んじたるを執りて、中央高く蓮花、
座の上に坐し、其左右に各十人の侍者あり、一々其名を明かにせず、
と雖も、思ふに無著世親護法戒賢等を始として、一宗相承の高僧碩、
他を集會せしものなるべし、菩薩の左邊下方に當つて眼遮立ち氣宇、
の凡ならざるは慈恩大師基ならむ、近く經を手にするは玄奘三藏か、
南都興福寺の寶藏なる彌勒菩薩像の男子扉に畫けるもの、尙廻つて、
は同寺北面堂の板壁に繪ける高僧像も亦各其本尊と相俟つて、所謂、
法相曼荼羅を形づくれるなり、鎌倉時代の中葉より諸尊集會の畫像

を指幅にすること流行し、本寺また法相曼荼羅の如きを新調して、
之を崇拜するに至り、從よてまた本圖をも造れるものならむ、繪風、
には宋元畫風の浸漸せること夥たしくして、然も其だしく鐵龍の、
致を帯びたれば、或は足利初世南都畫佛師の手に成れるか、繪事の、
巧を窺ふも可なれども、寧ろ宗教畫として興味ある資料と云ふべし。

第十七、 浴室門

浴室門の創立沿革の微すべき記録存せず、現今の建築は室町時代に、
屬する四脚門にして、此種の門に通有なる面取控柱あり、其面幅比、
較的大にして、柱内幅の凡そ三、五分の一に相當す、構架には斗、
拱大斗肘木を用ひ、豪輪の上普通束又は輪股を置くべき所に、唯、
に板を張れるのみ、側面破風の懸魚は梅鉢懸魚にして古様を存し、
屋根は圓に明かなる如く木瓦葺にして繁様なり。



佛造像八十四尊全 佛尊

此像之面容，與前代佛像之面容，迥然不同。其面容之恬靜，其眉目之清朗，其唇頰之微紅，其髮髻之圓潤，其耳垂之垂墜，其手足之纖細，其衣褶之飄逸，其整體之風采，均與前代佛像迥然不同。此像之面容，實為唐代佛像之代表。其面容之恬靜，實為唐代社會安定、人心安樂之反映。其眉目之清朗，實為唐代文人士大夫之理想。其唇頰之微紅，實為唐代貴族之氣派。其髮髻之圓潤，實為唐代婦女之流行髮式。其耳垂之垂墜，實為唐代佛像之特徵。其手足之纖細，實為唐代佛像之特徵。其衣褶之飄逸，實為唐代佛像之特徵。此像之面容，實為唐代佛像之代表。其面容之恬靜，實為唐代社會安定、人心安樂之反映。其眉目之清朗，實為唐代文人士大夫之理想。其唇頰之微紅，實為唐代貴族之氣派。其髮髻之圓潤，實為唐代婦女之流行髮式。其耳垂之垂墜，實為唐代佛像之特徵。其手足之纖細，實為唐代佛像之特徵。其衣褶之飄逸，實為唐代佛像之特徵。

此像之面容，與前代佛像之面容，迥然不同。其面容之恬靜，其眉目之清朗，其唇頰之微紅，其髮髻之圓潤，其耳垂之垂墜，其手足之纖細，其衣褶之飄逸，其整體之風采，均與前代佛像迥然不同。此像之面容，實為唐代佛像之代表。其面容之恬靜，實為唐代社會安定、人心安樂之反映。其眉目之清朗，實為唐代文人士大夫之理想。其唇頰之微紅，實為唐代貴族之氣派。其髮髻之圓潤，實為唐代婦女之流行髮式。其耳垂之垂墜，實為唐代佛像之特徵。其手足之纖細，實為唐代佛像之特徵。其衣褶之飄逸，實為唐代佛像之特徵。



佛體八十四銅金 物佛



石室山藏

石室山藏. 佛部八十四部全. 物部



金剛經

圖五(AMR) 佛體八十四鎏金 物類



阿彌陀佛

佛體八十四制全 物部



石室山藏

石室山藏 佛造像六十四尊全 佛碑



佛國寺藏

佛國寺藏 佛國寺藏 佛國寺藏



五十五

五十五, 佛造八十四身全 物佛



石塔八十四號

石塔八十四號



石室山藏

佛坐像 八十四卷 第八十卷



佛體八十四顯金 物部



七 時 像 立 蘇 普 世 觀 行 夾 堂 法 傳



大正十一年

佛立像菩薩普世觀於大 堂法傳



238. 像立菩薩普世觀行夫 堂法博



金法像

(四八) 印度西晉世觀音菩薩 金法像



一國畫院藏明三尊多羅天像



10-11

10-11

10-11

大正六年十二月廿七日印刷
大正六年十二月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂

終

